天理教教義翻訳の諸相 ②

天理教海外部翻訳課
天理大学非常勤講師
成田　道広　*Michihiro Narita*

英国布教と教義翻訳

明治41（1908）年、技術者として大阪に滞在していたイギリス人、トマス・ローズが船場教会を訪れた。彼は、一説によるとグリーンの論文によって天理教を知り（上村，1959:135）、自身が信仰していたクリスチャン・サイエンス（病気の原因は心にあると説くキリスト教系宗教）との類似性から「身上たすけ」に関心を寄せていた。海外伝道を熱望していた梅谷梅次郎会長はこれを契機に明治43（1910）年、3人の布教師を英国へ派遣した。

その華々しい鹿島立ちは同年7月号の『みちのとも』に「去月廿五日船場教會より赤木徳之助高見庄蔵正信藤次郎の三名を英京倫敦へ布教に派遣した、是れ天理教海外布教の嚆矢（こうし）なると共に日本海外布教の魁（さきがけ）である」との序文に始まり、詳細に記されている。

渡英に先立ち、船場から布教用英文小冊子 *History, Doctrine & Practice of Tenrikyo*（Tenrikyo Senbakyokwai, 1910）（以下、『英文天理教』）が出版された。これは、中西牛郎に執筆を依頼し、ローズの通訳者、福永秀夫に英訳を依頼したものである（濱田，1981:108）。編集には英語学校に通い渡英に備えた高見庄藏が書記として参加した。文書伝道が比較的軽視されていた時代、中西のために天下茶屋に一軒家を借り、福永にも謝礼を出し、経費を度外視してこの小冊子は作成された（梅谷，2010:17）。これは教内初の教義翻訳書となった。内容は「序文」「教祖」「教会」「神」「人間」「救済」「信仰」「事業」「儀式」となっており、「みかぐらうた」第一節から第四節の英訳も含まれている。

著者の中西は天理教と関わりが深く、明治33（1900）年から、井上頼國、逸見仲三郎らとともに雇用され、一派独立請願のための天理教教規や教典、みかぐらうた釈義の編纂などに携わった人物である。その招聘には松村吉太郎が関わっていた。中西は宗教学者として著名で、日本仏教の思想的改革に影響を与えた『宗教革命論』等を著した。彼は時には天理教校の教壇にも立っており、渡英した高見の恩師にもあたる。その後『英文天理教』は邦訳され『みちのとも』の明治43年9月号から連載されると大きな反響があり、大正3（1914）年に『訳文天理教』として道友社から出版された。

しかし、英国における『英文天理教』の評価はそれほどではなかったようだ。これに関心を抱いた現地新聞『デイリー・クロニクル』（*The Daily Chronicle*）誌の記者クラレンス・ルック（Clarence Rook）は、キリスト教の優位性を強調しつつ、次のように論じた。

「天理教とは、新なる食物、新なる飲料、又は新なる遊戯の名に非ず。而してそは英国に於て誇大的に廣告せられしものにも非ず。僅かに若干の人の是を倫敦に於いて耳にせるのみ、四名の質朴なる伝道師日本より来りて、ベッドフォード・パークに一家を構へたりしが一小冊子を残して帰国したり。而して此の冊子は日本大阪に於いて印刷せられ、英国に於て発行せられしものにあらず。然りと雖も、余は、今茲（ここ）に、諸氏に望まんとするは、嘲笑を以てこの書を迎へられざらん事これなり、何となれば、諸氏の日本文を書く能はざると同じく、此の小冊子の匿名の著者も亦、英文を善くせざるなり。」（『みちのとも』，1912年6月号）。

また、これを読んだ英国人は「天理教の教理内容は既にキリスト教で説いていることである。キリスト教ほど素晴らしい教えは世界にないのであるから、英国では余り天理教に改宗できないであろう」と感想を述べたという（梅谷，2010:18）。

『英文天理教』では、立教時の教祖の様子を「天国より降臨した天使のように輝き」（as if an angel coming down from heaven）、現身お隠しを「教祖は90歳で天国に召された」（she went back to heaven on her reaching 90 years of age）、八つのほこりを「八つの原罪」（the eight sins）と、キリスト教の語彙が多用され、「心の清き者に幸福あり。その人は神を見る。」（Blessed are the pure in heart; for they shall see God.）とマタイによる福音書とほぼ同じ表現も用いられていた。また「うらみ」の説き分けでは「キリスト教の黄金律である汝敵を愛せよ」（in the Christian golden rule, that love your enemies）と、敢えてキリスト教的理解を促す表現もなされた。

英国人の宗教理解の基盤は既存の宗教によって形成されている。彼らが理解した天理教は、彼らに受容された天理教であり、当然、天理教者が伝えようと試みるものとは異なり、変容した天理教となる。これは海外伝道における不可避な問題の一つである。そのような受容と変容のはざまで、その理解を翻訳によっていかに操作し得るかが、翻訳という文書伝道の生命線である。

船場の英国布教は最終的には頓挫し、高見庄藏の帰国を以て途絶えた。その背景には言語能力や経費、人間関係など様々な事情が垣間見えるが、なかでも英文教義書が小冊子以外ほぼ皆無であったことも要因として考えられるだろう。実際、布教に協力的だったローズは確固たる教義書作成が急務であると助言していた（梅谷，2010:73-74）。

英訳に関わった福永は、高見が帰国してから親交があったようだが詳細は不明である。中西は最終的には天理教者となり、晩年病に倒れてからは松村吉太郎の許に身を寄せ、そこで出直（逝去）したので葬儀は高安詰所で執り行われた（『海外伝道部報』，1963:6）。彼は英国布教に関し、中西顕明の名で『みちのとも』大正元（1912）年8月号に寄稿し、布教の実際と『英文天理教』の反響を紹介している。さらに昭和4（1929）年に天理教者として出版した『神の実現としての天理教』では「英國伝道は、事跡の上から見たなれば、全然失敗に終わつたやうであるが、併し始めて天啓の聲を、歐洲文明の中心たる英京倫敦に響かせたのは、小寒子が始めて天理王命の御名を大阪市民に知らしめられたと同様に、全能の神から御誉めを頂くべきである。」（中西，1929:426）と、その功績を讃えている。

他宗教の伝道史に比すれば、天理教の海外伝道はまだ緒に就いたばかりであり、現在もなお、英国では布教の歩みが受け継がれている。『英文天理教』も期待された成果を挙げたとは言い難いが、教義翻訳の先鞭をつけた意味では先達の偉大な足跡であり、英国布教同様、過去の失敗として終わらせるにはまだ早い。否、終わらせるわけにはいかない。

[引用文献]

History, Doctrine & Practice of Tenrikyo, Osaka, Japan: Tenrikyo Senbakyokwai, 1910.
「ロンドン布教始末記（三）」『海外伝道部報』天理教海外布教伝道部、1963年6月26日号（通号61号）、pp. 6-7。
梅谷忠一『英国布教ハ天ノ指名也』天理教船場大教会、2010年。
上村福太郎『潮の如く（上）』天理教道友社、1959年。
天理教道友社「天理教とデーリー・クロニツクル」『みちのとも』、1912年6月、pp. 2-10。
中西牛郎『神の実現としての天理教』平凡社、1929年。
濱田泰三『道のなかばに』天理教道友社、1981年。